

(銀のエンジェル賞 中学生の部)

## キツネ村からのSOS

中二・神谷 祐香

待ちに待った夏休み！今日は七月二十一日。夏休み初日だ。僕は動物大好き小学五年生のけんた。今日は家族みんなで動物園へ行く予定だ。ライオンに肉をあげたいな。ウサギをだっこしてみたいな。オオカミの遠吠えがきけたらもう最高なんだけどなく。

「けんた。何やってるの、行くよ。」

僕が動物とふれあっているイメージをしているところへ母さんが割りこんできた。

「何やってるのじゃないよ。ずっと待ってたんだから。」

そう母さんは楽しい所へ行くときに限って、メイクがどうの、髪型がどうのとブツブツ言いながら洗面所からなかなか出てこない。そして今、大変身した母さんが洗面所から登場したとこだ。父さんは母さんを待っている間にタバコを吸って戻ってきた。さあ出発だ。いよいよ車は動物園へと向かって勢いよく発進した。動物園へは一時間ちよつとある。でも僕は楽しみにしすぎて何時間も車に乗っていた気分だ。入場券を見せてスキップしながら中に入った。やはり動物園とは動物好きにはたまらない所だ。天に向かって高くそびえるキリンの首。岩の上に立ち凛々しい顔つきで唸るライオン。まさに百獣の王だ。マジシャンのように器用に鼻を動かして食べ物を貰うゾウ。やっぱり何回来ても飽きない。

いろんな動物を見て回る約一時間半。動物園の全ての動物を

コンプリートするまであと半分くらい。僕たちはキツネゾーンに入った。キタキツネ、ギンギツネ、プラチナギツネにホッキョクギツネ。やっぱりかっこいいな。山の神様みたい。ん？そのときだ。僕は奥の方にいるキツネと一瞬目が合った気がした。まあ気のせいだろう。動物好きのあるあるだ。ところがやっぱり目が合うのだ。服に何か付いてるのかな？白のTシャツにジーンズ。とくに他の人と変わったところは無い。不思議な感覚でキツネゾーンを離れた。父さんと母さんはもう足が疲れたらしく園内のカフェで休憩すると言っている。よっしゃあ！自由時間だ。いろんな動物を見て回るぞ！ここは：キツネゾーンの裏側か。やけにうす暗くて人が居ないな。こんな所あったっけ。辺りは荒地のようで建て物の壁にはコケがびっしり生えている。ということは北側か？いや、キツネゾーンの北側はフラミンゴの池があるはず。なんだか胸さわぎがするような気もする。そのとき草むらからガサガサという音が聞こえた。僕は恐る恐るそちらに目を向ける。黄色く光るとがった目。足は黒くて大きな尻尾。あのキツネだ!!じっと見ていた。

「ケンタ君。そこに居たのかい。」

ええええ!?!喋った。キツネが喋った。もう訳が分からない。頭がおかしくなりそうだ。てかなんで僕の名前が分かるの!?

「びっくりするのは分かるけど少し落ち着いてくれないかい？」

キツネがそう言った。

「いやこの状況で落ち着ける訳ないでしょ。」

僕の口からとっさに出た。

「うん。ツッコめる時点で君は落ち着いていると思うよ。」

とキツネに言われた。なんだか面白いキツネだな。そしてキツネはゆっくり話し出してくれた。

「気付いてたかもしれないけど僕は今日ずっと君のことを見ていたんだ。」

やっばりな。

「そして君ほどの動物に対する執着ぶりを初めて見た。」

そんなにめずらしいのか僕…。

「それで：どうしても君にたのみたい事があるんだ。」

「たのみたいこと？」

「僕たちの世界へ来てくれっ。」

ええええ!?!どうゆう事だよ？

「人間と同じように僕たちキツネにも世界があるんだ全く同じような。」

なんだそれ!?!いわゆるパラレルワールドってやつか!?

「それで僕たちの世界を救うために：君を召喚したいんだ。」

わぁお召喚！すごい、ゲームみたいだ。僕にしかできない頼み事ね。大好きなキツネが困ってるなんてほっとけないよ！

「よし僕行くよ。」

そう張り切って答えていた。

「ありがとう本当にありがとう、じゃあ急いで行こう、目をつむって！」

僕は目をつむってキツネのいいよ！という声で目を開けたとたんいままであった景色とは全く違う世界が広がっていた。わ！キツネが全員二足歩行!?!まずはじめに気が付いたのはそれ。そして人間と同じように車を運転したり店に入ったり公園で遊んだりしている。ただただ驚くことしかできなかった。そして僕は空を見上げたときとんでもないことに気付いてしまった。口元が：長くのびている!?!鼻先が黒い。そして手を見たときとうとうさけば声をあげてしまっ

---

た。自分が：キツネの体になってる…。

「ああゴメンね、他のキツネがびっくりしちゃうから君もキツネにしておいたんだ。」

キツネが謝ってきた。

「嫌？だった？」

「メツチャうれしい。」

「…!？」

動物になれるなんて最高じゃない？僕はそう思うけど。え？そう思ってるのは僕だけ？

そして僕たちはとある村を目指して歩いてきた。村に着くまでキツネにはいろんな事を教えてもらった。まずキツネの名前はこんぺい。こんぺいは村の長老の孫で僕を召喚したのは村の危機を救うため。その村はキツネ村という。キツネ村の山奥で長く封印されていた神が目覚まし、封印されていたことに腹を立て世界を支配しようとするという。それを止めるのが仕事か。でもどうして人間の僕が？考えている間に村に到着。さっそく長老に会いに行つた。

「おお：君こそが勇者のけんた様か。」

勇者って…。長老は僕を大歓迎してどうして僕を呼んだのか話してくれた。

少し前までこの村にも勇敢な兵士がたくさんいたらしい。しかしその兵士は一匹として帰って来ることは無く後に四角い油あげとなつて長老の家に出現したという。そしてある日、運良く帰還した兵士がこう話した。神のいる洞窟の周り一面に油あげがぶらさがつていてキツネを引き寄せてしまう呪いがありその油あげを食べてしまった兵士は油あげになつてしまったという。そしてそれが長老の家

---

に現れた。なるほどね。それで呪いの効かない人間の僕が……

「僕今キツネになってない？」

「大丈夫。見た目がキツネなだけだから中身は人間だよ。」

こんぺいが教えてくれた。

僕が戦いの準備をしていると長老が来てこれを持って行きなさいと先祖代々伝わる剣を渡してくれた。えーボロボロだけど……。持ちは欠けていて刃はさびている。使えるのかな。そして準備を終えて出発しようとしたそのとき。

「待って！僕も行く。」

こんぺい？

「え？君は真正銘のキツネじゃないか。」

「……確かに僕はキツネだ。でもこの村を……この世界を救いたい！世界を救う力になれるのなら……油あげになっても構わない、だから……僕も行く。」

僕はこんぺいの瞳に吸い込まれそうになった。黄色くて明るい。夕日の光を反射して美しく輝いている。どこか悲しそうでおびえているような目。でもその瞳の奥底からは燃えさかる炎のような光が見えて敵に立ち向かう勇氣と覚悟を感じた。

僕とこんぺいは三日かけて神のいる洞窟にたどり着いた。こんぺいには目隠しをして誘導しながら進む。目隠しをすれば良いのか。こんぺいにはなんの異変もおきていないようだ。洞窟の中には呪いの油あげはないようでこんぺいの目隠しをとって進んだ。その時、

「動くな。」

誰かの声が聞こえた。どうやら神の部下っぽい。剣をかまえて走ってくる。するとこんぺいがものすごい速さで倒した。

「すごいねこんぺい、身体能力どうなってるの？」

「まあキツネなんで、あは。」

そんな感じで部下を倒していき神がいる部屋らしきところの前にきた。よし、せーのでドアを蹴破るぞ。テレパシーで伝えて二匹でうなずいた。せーの！ドアーーン!! ドアが開いた。

「ここまで来れるとはなかなかですなあ。何をしに来たのかね。そのガキども。」

「お前を倒しに来た。」

二匹で答えた。

「ほう俺に挑む気か、度胸だけは認めてやろう。」

「こんぺい！行くよ！」

「うん！」

一緒にたち向かおうとしたとき、神が不思議な光を出してきた。まさか、こんぺい！とっさにこんぺいを見ると

「あ：油あ：げ油あげ食べたい：。」

「こんぺい!!」

「僕油あげ：。」

：!!こんぺいが油あげになってしまった。そんな。ウソだ。

「呪いが効かないとは、貴様、キツネではないな。」

神は光を出すのを止めて僕をにらんでいる。ここで僕になにかのスイッチが入った。本気というスイッチだろうか。

「よくも：こんぺいを：僕の大事なこんぺいを！」

力がみなぎってくる。体が熱くて炎が燃えているようだ。すると、なんとあのボロボロだった剣が光り出したのだ。みるみるうちに持ち手がきれいになって刃も鋭く全くさびていない。新しい剣のようだ。気づけばすごいスピードで動いて神を倒していた。そして体が光りいつのまにか長老の家の前に立っていた。

---

「おお！勇者が帰ってきたぞ！！」

まわりのキツネたちが喜んでいいる。

「神を倒しました。でもこんぺいは…。」

「けんた君！」

え、こんぺい!?よかった。復活したんだ。兵士たちも元に戻っている。キツネ村の皆に盛大に祝ってもらって最後に長老からなにか渡された。

「これはお守りとして使ってください。わしらキツネはずっと見守っております。」

それは、黄色くてふわふわとしたキツネの尻尾のようなキーホルダー。あれ？皆の姿がかすんで見える…。気づいたら動物園のキツネゾーンでキツネをながめていた。なんだ夢か。リアルな夢だったな…。

「おーい。けんた。お前もきつねうどん食べるか？」

あ、父さんだ。

「うん。食べる。」

あれ？僕のズボンのポケットになにか入ってる。黄色くてふわふわしたもの。あの尻尾の形のキーホルダーだった。

---